出会う!! 働く!! 考える!!

十日町 雪掘りキャンプ

2019年2月13日～17日、十日町雪掘りキャンプが開催されました。このキャンプ、「2004年中越地震の被災地でもあり、時に雪害と呼ばれるほどの豪雪地でもある十日町で、日中は雪掘りボランティア体験、夜は被災支援についてのレクチャーを通して、青年たちの交流をはかり、また他者の為に働くこと、助け合って生きることの意味を再確認する」というキャンプです。「キャンプを通して、被災の経験を分かち合い、被災支援の在り方を検証・継承し、今後の被災支援のためのネットワークを醸成する」というのも目的の一つとなっています。

今年の参加者は、講師、スタッフ含め、総勢32名。今回初めて参加してくれた人もいれば、「もう一度、雪掘りキャンプに参加したい」という願いをもって参加してくれたリピーターもいます。毎年必ず「来年も参加したい」との思いが与えられる人がいるというのが、このキャンプの不思議な力なのだと思いますが、それはキャンプの中で「いのちに触れる瞬間」があるからなのだと思うのです。

嫌というほどの豪雪にしんどい思いをしながらも、雪を敵とするのではなく雪を友として、希望をもって生きる人たちの姿に光を見るのです。被災支援のレクチャーで語られる「被災地での出会い」に心打たれる時が確かにある。そしていのちを支えたいと被災支援に関わる人たちの願いや祈りが、語られる言葉の背後に伝わってくる・・・そんな「いのちに触れる瞬間」は、同時に、自分たちの中にもある命を感じ、自分達もまた、それぞれの願いや祈りの中に生きていることを再確認する瞬間なのです。そんな命と命が触れ合う時の中で、「自分の命を生きよう」「一緒に生きていこう」そんな励ましが湧き上がってくるのだと思うのです。今年も、そんな「いのち触れ合う時」を共に過ごすことができたことに感謝しています。みなさまの、お支え、お祈り、ありがとうございます。

（長倉望／新潟教会牧師・キャンプディレクター）

“紡ぎだされた言葉”

Tさん／新潟地区

雪掘りキャンプを通して新しく出会えた皆さん、またお食事をはじめ支えて下さった皆さん、何より心温まる歓迎を下さった十日町教会の皆さんに心から感謝します。体力的にも日程的にもあまりお力にはなれないと思いながらの参加でしたが、十日町教会員さんの「たったひとかきでもいい、それが雪を減らしていく」との言葉を通して、この地に足を運ぶことの大切さを感じさせられました。夜の被災支援学習の中でも上島先生が言われた通り、“紡ぎ出された言葉”に出会う時が与えられました。また2004年の水害や震災、そして雪害に

対する支援がどのようになされてきたのかをお聞きする中で“その場にいるかのよう”に感じ、上島先生の最後の「ありがとうございました」との言葉に私も目頭が熱くなりました。いつ・だれが・どこから足を運んで下さり、どのように支援下さったかなども具体的にお話くださり、災害という非日常の中で記憶・記録しておく大切さを感じさせられました。

それらに加えて朝の礼拝では幼い時に中越地震において被災し、ボランティアによる支援を受けたことを話して下さった高校生や、東日本大震災において大切な人を亡くした方の夢について調査し、書籍化された学生さんのお話を聞く大切な時も与えられました。突然の依頼にも関わらず、それでも丁寧に準備し、お話くださったことに感謝です。

また長倉先生の熊本・大分地震の際、支援物資のお米 400 k を届けられたという出来事が「日頃からの人との繋がりの結果である」ということに、改めて“私は日常において繋がり合うことが出来ているだろうか”と問われたように思います。十日町雪掘りキャンプに限ったことではありませんが、足を運ぶことが全てではなく、それぞれの場所に戻ってから、どのように出会い・繋がり・歩んでいくのかこそが本当に大切なことであると思います。

手束先生は“雪かきは肉体的にも精神的にも辛く、孤独と徒労感との戦いである”との思いに加えて、“雪かきは自分だけではなく誰かのためである”ということも共有して下さいました。他者と共に生きる実践がそこに確かにあることを思わされます。

昨年の豪雪の際には新潟の各地に、遠くからも近くからも足を運んで下さった方々がおられました。覚え支えてくださる方がいてくださることに感謝しつつ、私もそんな一人として歩んでいくことが出来ますようにと与えられた場所に戻りたいと思います。

最後に、いつも完成した雪像を写真などでしか見ることがなく、今回も日程的に完成を直接見ることは出来ませんでしたが、少しばかり雪像を削る作業に加わり、このように作られているのだということを知ることが出来ましたことを嬉しく思います。

“雪が大好きになりました”

Ｉさん／京都教区

今回初めて雪掘りキャンプに参加し、初めて新潟を訪れました。私は北海道生まれですが、生後 8 ヶ月で東京に引っ越し、大学からは京都に住んでいます。そのため、皆さんが「今年は雪が少ない」と言っておられましたが、十日町で見た雪は私にとっては人生で一番の大雪でした。行きの車で、富山辺りから雪が増え始め、気がついた頃には、山々や、町の一面が真っ白な雪景色になった光景に私の心は躍りました。雪は儚く、綺麗なものだというイメージを抱きながら、私の雪掘りキャンプはスタートしました。

初めての雪、その中での雪掘りのワークは「過酷さ」を体験するものとなりました。私が体験したものは、傍から見ると大したことでは無いと思います。しかし、何回も積もって固くなった雪、屋根や二階から落ちて来る雪や雪の上に雨が降って重たくなった雪など、様々な条件によって変化する雪を、毎日変わらず自分達の手で、除雪しなければならないことは肉体的にも精神的にも、経験してみなければ分からない大変さがありました。特に十日町は豪雪地帯なので、その毎年やって来る苦労は計り知れないものだと感じました。私はわずかなワークの体験からでも感じられるほどの雪の脅威や、講演で聞いた過酷な除雪の話を通して、雪は自分の抱いていたイメージとは違い、決して良いもので

は無いなというイメージをその時、抱き始めていました。しかし、講演の最後のディスカッションの時間に、十日町教会の教会員の方が「大変だけど、雪はそのうち終わる」とお話をされていました。私はその言葉にハッとさせられました。雪が良い悪いではなく、そこにあるのはその方々が毎日送っている日常の暮らしなのだと気付かされました。雪に慣れてない私から見ると、雪は大変だという一言で完結してしまいますが、雪と共に生きてきた方々は、過酷ではあるが、「そのうち終わる」という考え方を持ち、その先を見つめ雪と共にたくましく生きているのだと感じました。都会では分からない、四季を感じながら暮らすということは過酷さを伴いながらも、人間を強く、たくましく、美しくするものだと思いました。

キャンプの３日目には講演の中で、被災支援を通して人に寄り添うことの意味、またその中にあって良い距離を保つことの重要性など、人と接する上で大切なことを学びました。「誰かがやってくれることを他人事と思わずに、自分のことだと思って接すること。」「誰かに寄り添うことは自分もしんどい事だけど、だれかが側にいてあげないといけない。じゃあ、私が。」自分に何が出来るかはわからないけれども、関わっていくことの大切さを改めて考えさせられました。また、支援や人に寄り添うことに目的はいらないという事を深く感じました。何かときっかけや理由がなければ自ら関わる事が出来なかったり、あらゆる事を遠ざけてしまったりする自分がいますが、そうではなく、力になれなくても近くにいて一緒に歩んで行くことができる人間になりたいと強く思いました。

雪掘りキャンプを通して、雪掘りの過酷さを感じることができ、様々な出会いも与えられ、自分は改めて一人で生きているのではないと感じました。私にとって非常に実りの多いキャンプとなりました。支えて下さった皆さんに感謝します。ぜひまた来年も参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。総じて雪が大好きになりました。

“再会の場としての雪掘りキャンプ”

Ｏさん／茨城地区

昨年に引き続いて、２度目の参加になった今回の雪掘りキャンプ。新しい出会いと、学び多き時を過ごさせていただきました。

今年は例年に比べて、雪が少ないと聞いていましたが、毎日筋肉痛になるほど、雪掘りをさせていただきました。昨年はがっつきすぎて、すぐばてたり物を壊してしまったので、今回はコツコツ少しずつを意識しました。休憩もところどころに挟みました。そうすることで、地元の方と沢山のお話をすることができ、様々な支援の形があることを知りました。

朝の礼拝のお話では中越地震で被災し、実際に仮設住宅に住んでいた経験のある高校生のお話や、東日本大震災で被災された方の見る夢についての研究をされた、先輩のお話、北海道胆振東部地震の支援のお話を聞くことができました。様々な場面、角度から被災支援学習を行う事が出来ました。

２年目に参加する事で新しく気づいたことがあります。それは、このキャンプは新しい出会いや、学びがある時であると同時に、再会の場であるということです。同じ高校の卒業生、キャンプのリピーター、受け入れてくださった教会の皆さんとの繋がりを再確認しました。敬和ロスにかかって、元気が無くなっていましたが、懐かしい再会でエネルギーを充電することができました。これであと一年頑張れます。来年もまた来たい！そう思えるキャンプでした。ありがとうございました。

“出会いを求めて”

Ｆさん／京都教区

出会いを求めてきた。それが私にとって雪堀りキャンプに参加する一番の目的だった。

4 泊 5 日、日中は雪堀ワークを、夜は被災地の学びをする中で、たくさんの人や言葉、景色と出会った。特に夜の被災地の学びは吸収するだけで精一杯で、その場では消化しきれないほどだった。その学びの中で共通して語られたのは、日常の大切さだった。日々の人との繋がりや生き方が非日常の時に顕著に表れるということ。その話を聞きながら、もし、今、震災などの非日常の生活になったら、私は一人になってしまうのではないか、助からないのではないか、もしくは助けを求めないのではないかと思った。私はコミュニティーに入るとき、また他者との関係において、そのコミュニティーや他者と繋がっていたいと思う反面、その人たちの中に入っていけばいくほど、周りから距離を置いて一人になりたくなる。繋がりを求めているのに同時に繋がりを切りたくなる。そんな状態の自分を見て、今の私は日々の人との交わりを大事にできているとは思えない。そんな自分と向き合わされた時間だった。でも、今すぐその自分を変えようとは思っていない。繋がりを大事にしたい自分と一人になりたい自分、どちらも私なのだから、焦らず時間をかけて、その二つの自分が繋がっていけばいいと思う。その時きっと本当の意味で人との繋がりを大事にできるのではないかと思う。

そしてもう一つ。3 日目の夜の柴田先生の話の中で、「寄り添う」というものがあった。先生は「寄り添うということはその人の半歩後ろをついていきながら、その人の二歩先を見るということだ。」と話していた。先程の話と繋がるが、私は大事なコミュニティーほど、大切にしたい人達ほど距離感が分からなくなり、大切にできない。どうしたら感謝の気持ちが伝わるのか、適切な距離がとれるのか、相手を大切にできるのかわからなかった。でも、この先生の言葉は今の私の前にヒントとして現れた。私もそんな風に寄り添ってもらえたら嬉しいし、そんな風に寄り添えたら相手も気持ちいいのではないかと思う。その後に語られた先生の言う「愛」という言葉は「ある特定の個人に向けた働き。だから時に間違うことがある。僕はそれでもいいと思う。」というものだった。愛がこういう形のものだとするならば、今までしてきた数々の失敗を乗り越えて、私はまたやり直せると思う。そして、お互いの間に風の通り道ができるような寄り添い方ができたらいいなと思う。

今回の目的だった「人と出会う」ということは、私の中で「自分から出て会いに行く」という意味合いだったが、私はなかなか自ら出会いに行けなかった。それにもかかわらず、たくさんの人が出会いに来て下さった。出会ってくださった方々、寄り添ってくださった方々、見守ってくださった方々、皆さんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

“自分の居場所”

Ｓさん／新潟地区

今回 2 度目の参加となった雪掘りキャンプ、たくさんの新しい出会いと、懐かしい出会い、また新しく学ぶことと、再び学ぶこととがあり、私にとってはとても充実した 4 泊 5 日だった。ワークの方では、十日町の人たち

が普段雪とどのように向き合い、またどのように雪と親しんでいるかということを学んだ。雪が少ないと言われた今年の十日町市だが、私たちからしたらとても量が多いと感じた。普段私たちが行うのは雪かきで、スコップなどでかけばすぐに地面が見えるが、十日町では雪を掘るというかたちでとても体力を使った。複数人でやってもしんどいのに、この作業を普段１人で行っている十日町の人たちはすごいなと、とても尊敬した。とある方がお話の中で、「雪掘りは体力的、精神的にもくるし、1人でやると孤独感を感じる。せっかく雪を掘っても、一眠りして次の朝起きると掘る前のように積もっていて、徒労感を感じる。」とおっしゃっていた。私は、そのことを体感しました。その様に感じていても、雪像などを造り雪と親しむ町の人たちはすごいと思った。雪を嫌わず、むしろ好きになれる方法をとるのは良いなと思った。被災支援の講演会では、様々な被災支援を行ってきた方や、直接被害にあった方など、様々な角度からのお話が聞けた。支援をして学んできたことは日常生活にも活かせることが多いと感じた。例えば、“１人で居ることや作業をすることは孤独感を感じ辛い。だから１人の人を見つけたら寄り添い会話をしたり、助け合ったりする”ということなどだ。被災支援のお話を聞き、また雪掘りキャンプ全体を通して学んだこと、感じたことは、“普段の私生活がいかに大切で、平和か”と言うことだ。私は普段の生活で、周りには仲間がいて、協力し助け合うことができる。時には、１人になる時間があり、物事をゆっくり考えられる。そして、日常の生活には必ずと言って良いほど自分の居場所がある。講演会のお話の中で、「居場所がない人の為に居場所を造る。その為に動く。」というお話があった。それを聞いて、居場所があるという事がどれだけ大切なのかということを学んだ。なので、今ある自分の居場所を大切にしていこうと思った。今回の雪掘りで学んだこと、経験したことを何らかの形でこれからの生活に活かせて行けたらいいなと思う。

“多くの気づきが与えられる場”

内山友也／京都葵教会牧師・キャンプ講師

久しぶりに十日町雪掘りキャンプに参加することができ、改めてこのキャンプは多くの気付きが与えられる場であることを感じました。初めて雪掘りツアーに参加したのは今から７年程前ですが、当時十日町教会の牧師をしておられた新井純先生が、遅れて参加した私を手厚くおもてなししてくださったことを今でもはっきりと覚えています。昼食に出してくださった汗だくになる恵みのカレーをいただきながら、ここから数日どうなるのだろうかと少し不安に感じたことも振り返るととても良い思い出です。

また、十日町に初めて来た年は豪雪の年で、教会の園庭の遊具も埋もれ、教会の裏側の道を開通させるために１日かけて除雪したのを覚えています。しかし、次の日になると３分の２は元に戻っていて、毎日雪をかき続ける生活の苦労を味わいました。今回の講演会で手束先生が栃尾の地で除雪する中で徒労感に苛まれるということをお話くださったように、雪と付き合う生活はその徒労感との闘いでもあることを、実際に雪に触れることで初めて知ることができたのもこのキャンプを通してでした。

しかし、雪は厄介なものでしかないと思い始めた頃に、そうではないということも教えられました。昔ワークをしている最中に近所の方と話す時間があり、その中で、「雪おろしは確かに大変だけど、雪は友達みたいなもんだ。」と言っておられたのを思い出します。また、今回の最後の振り返りの時間に、三浦先生が『雪国には「利雪」という言葉がある。』と言っておられましたが、雪を利用して生活に活かしながら、友達のように付き合っていく。外から来た人間からすれば厄介なものでしか感じられないことも、現地の方にとってはそれも豊かな恵みとして受け止めておられることを知れたのは大きな気付きでした。

特に、いわゆる被災地と呼ばれる地域に、これまでたくさんの人がボランティアに入っていきました。しかし、外から来た人間にとっては「瓦礫」にしか見えない物も、そこで生活をしていた方々にとっては大切な思い出が詰まっていることがあります。ボランティアは自分の側からの視点ではなく、相手の側の視点に立って、そのペースに合わせて働きかけることが大切であることも教えられました。これは、私たちの日常においても大切にしなければならないことです。雪掘り一つをとっても、本当に私たちの日常において活かされる教えがここにはあります。

また、今回雪掘りキャンプに参加する上でもう一つ楽しみにしていたのは、新しく出会う人との交わりでした。最初はぎこちない雰囲気があっても、終わる頃には自然と会話できる関係性へと変わっていくのは毎年のことです。共に労をなし、ご飯を食べ、寝る。人と人とのつながりは一緒に生活をして行く中で、強く結ばされていくことを感じさせられます。

そして、災害は起こらない方が良いことが前提ではありますが、災害があったからこそ出会えた人たちがいることもまた確かです。今回の雪掘りキャンプも然りです。今回のキャンプに参加させてもらいながら、災害が残す爪痕の大きさを改めて感じつつ、しかしだからこそ、プラスとなる出来事を私たちは大切に守っていく必要があることを思います。また自分自身はそう考えられる人間でありたいと感じました。

これからも、この雪掘りキャンプによって、たくさんの人が繋がり、共に笑い、共に涙を流すことができるようにと心から願います。

また、今年もお忙しい中、最後まで面倒を見てくださった久保田先生ご家族を始め、受け入れをしてくださった十日町教会の皆様、企画から全てのご準備くださった先生方のお働きを心から感謝いたします。

“あの日あの時この場所で”　*(2月14日朝の礼拝メッセージより)*

Kさん／新潟地区

2004年10月23日17:56に中越大震災が起こりました。当時4歳だった僕は被災者になりました。正直、記憶はあまり残っていません。この話はあまり人に話そうと思ったことも、話したこともありません。この礼拝を通して話をさせていただきます。

2004年10月23日17:56新潟県十日町を震度6強の地震が襲いました。その後も4分おきに震度5が3回、4回目に震度6…その後も短期間で震度5・6が10回ほどありました。

父と母と生まれて間もない弟(0歳)、そして僕。全員が無事に避難しましたが、僕の家はこの震災で全壊しました。父とお風呂に入っていた時、いきなり停電してとにかく怖かったことを覚えています。

家が全壊したせいで1年間の仮設住宅生活を余儀なくされました。4人で4畳半1間の生活のスタートは、4歳の時の僕には新しい土地での生活を、楽しいようにしか思っていませんでした。父と母にとっては弟が生まれて幸せな生活が一瞬で先の見えない苦しい生活となったようです。

仮設住宅では家と家の間隔が狭く、隣の住民にそのまま声が聞こえてしまうため、0歳の弟が泣くことや、僕が楽しくケタケタ笑う声にたくさんのクレームがきました。隣人からは「いつもうるさいんだ」とノックがきました。母は僕が遊ばないように気をつけていました。母は仮設住宅生活をするまで僕のことを怒ったことがありませんでした。そのため僕は怒られているのか分

からず、遊んでくれているのだと感じケタケタ笑ってしまうのです。その度にまた隣人からノックがあり、母は怒るしかなかったらしいです。父と母はいらないことで僕を怒らなければいけなかったことを本当に後悔しているそうです。

仮設住宅にはたくさんのボランティアの方が来てくれたり、支援物資が届きました。カウンセラーの人や、そばをかきあげて振る舞ってくれた方や仮設住宅の子どもたちのためにクリスマスプレゼントをサンタさんが届けに来てくれたり、ボランティアや被災支援の形は様々でした。あの時のことをはっきりと覚えてはいません。しかし４歳の時に支援を受けたことを僕は今でも覚えています。この経験は自分の中でとても大きなことだったのでしょう。

僕は高校の先輩のＯさんに誘われて初めてこの雪掘りキャンプに参加します。長倉先生の「(このキャンプは)被災支援を想定して」という言葉にこのキャンプに参加できてよかったともうすでに感じてしまっています。自分が受けたあの温かい支援を状況や場は違えど、他の人に今度は自分が与えることができればいいと感じます。今日から始まるワークを自分の過去と重ねて意味あるものと出来るように頑張ります。

“ボランティアは大変でしたが…”

Ｋさん／東北教区

今回このボランティアに参加して私は行く前と気持ちが変わりました。行く前までは“雪像作りを楽しみながら行うだけだ”と思い、軽い気持ちでした。行ってみたら十日町のお宅に行き、雪かきのお手伝いをするというボランティアで久しぶりの雪かきがとても大変でした。１日目私は数藤さんのお宅に伺いました。屋根からの雪が家の２階まで積もっていて、どこから手をつけるのだろうと思いました。会津若松市も雪が積もり雪かきもしますが、量が全然違いました。水気の入った重い雪でしたので腕が痛かったですがおいしいお菓子、バランスのよい昼食、たくさんの休憩で疲れが取れました。時間になり数藤さんのお宅から帰る時に感謝され、私はやりがいを感じました。２日目の午前中は樋口さんのお宅でベランダから雪を落とし下の人が側溝に流す作業をやりました。そんな中でガラスが割れてしまうという事故が起きてしまいましたが樋口さんは神対応ですごく優しかったです。その時私は十日町の人はみんな家族のように接してくれて優しい方の集まりだと思いました。午後は雪像を作りました。途中からでしたので、どうやってやったのだろうと思いながら表面を削りました。

このボランティアを通して私は人間関係と災害の大変さを学びました。人間関係についてはコミュニケーションを取ることで仲良くなり助け合えることに気づけました。災害の大変さは夜の話を聞いて、自分が普段通り生活している間に食料が足りていなかったりなどでボランティアの人があんなに活動しているなんて思っていませんでした。その話を聞き私は人の役に立ち感謝され助け合いたいと思いました。このボランティアは大変でしたがまた来年も来てお手伝いをしたいと思いました。

“来年、また来ます！”

Ｓさん／東北教区

私は、このボランティアに誘われた時は正直まだ行きたいとは思いませんでした。しかし、被災者についての学習や、人のためになる雪掘りをすることに惹かれて友達と行こうと思いました。

初日は、まだみんな緊張していて初対面の人と話せず友達と一緒にいることが多くて仲良くなることが出来ませんでした。

２日目は、午前は岡田さんの家で雪掘りをして、午後は関口さんの家で雪掘りをしました。午前の岡田さんの家では大きい雪山にのぼり上から掘っていきました。最初の方は雪が柔らかく掘りやすかったですが下に行くにつれ固くなっていき少し汗をかいてしまいました。雪掘りを１時間やりその後はずっと休憩させていただきました。家の中にあがらせてくださり、こたつで温かいお茶とコーヒーをいただき、お菓子やりんごも出して下さいました。岡田さんは様々なことをしておられ、岡田さんが描いた絵や校章を見せていただきました。他には昔の学校のことやその時の友達のお話を聞きました。とても楽しそうにお話ししておられたので私たちもついつい笑顔になり、楽しい時を過ごせました。午後は関口さんの家に行きました。関口さんの家では雪掘りではなく、雪を広げて溶けやすくなるようにしました。関口さんの家でも休憩させてもらい、米で作ったパンとドーナツを食べました。米で作られているからどちらもモチモチしていてとてもおいしかったです。その日の夜はとても疲れていて私は早くに寝ました。でも、綾菜となつきは起きてみんなとトランプをしていたらしく、少しうらやましかったです。

３日目は、午前と午後とで、教会で雪像作りでしたが、午前の休憩時に体調を崩してしまい、午後のワークには参加できませんでした。でもたくさん寝たおかげで回復したのでよかったです。次はペース配分に気をつけて過ごしたいです。その日の夜は柴田先生の東日本大震災のお話を聞きました。私はまだ被害は少ない所にいたので少し他人事のように感じていましたが、他の県や地区のことを聞き、今更ですが、大変だったことに気づきました。当時私はまだ小学２年生のため、震災が起きたことをあまり理解しきれずに校庭に避難していました。だからこそ、今回この話を聞いてどれだけ大変で苦しい思いをたくさんの人がしていたかを知り、学べてとてもよかったと思います。

最終日は、午前と午後を使い、この作文を書いています。お昼はへぎそばを食べにみんなで行きました。へぎそばと天ぷらを食べましたが、どちらもツルツルとサクサクでとても幸せになる味でした。

私は雪掘りや被災地学習が出来たことだけでもいい思い出になりましたが、みんなと仲良くなり話したことが一生忘れない大切な思い出となりました。また来年来たいです。ではなく、また来年来ます。とてもすてきな４日間でした。

“充実した雪掘りキャンプ”

Ｎさん／東北教区

自分はこの雪掘りキャンプはとても充実していたと思います。なぜなら雪掘りに行った家の人たちとの交流と、メンバーとのたわいもない会話があったからだと考えます。

自分は樋口さんのお宅と数藤さんのお宅で雪を

掘りました。樋口さんのお宅では“玄関前の雪を掘って欲しい”とのことで自分も含めて４人のメンバーと行きました。

休憩も交えながらもしっかりとやることができ、樋口さんからのみかんやお菓子などの差し入れも受け取り頑張ることが出来ました。午後は３人で行きました。途中でかまくらを作ろうとなり作りましたが、最後のところで天井部分が崩れてしまい、写真に収めることが出来なかったです。でもとても楽しくやることができました。

数藤さんのお宅では、最初はお茶を飲みながらの自己紹介をしました。その後雪掘りをはじめました。途中で休憩に入り、コーヒーを飲みながら数藤さんの雑学を聞きました。

お昼は数藤さんのお宅で食べました。ウィンナーがとても大きくておいしかったです。その後、１時間半ぐらいの休憩をはさみ、また雪掘りをしました。仕事が終わった後は少しの間、雪合戦をしました。

このボランティアを通して、色んな人との交流を学びました。

“夢との出会いを通して” *(2 月 15 日朝の礼拝メッセージより)*

Ａさん／新潟地区

私は、仙台市にある東北学院大学の学生です。ゼミの活動で、震災遺族の方が見る亡き人の夢について調査と書籍(『私の夢まで、会いに来てくれた—3.11 亡き人とのそれから』朝日新聞出版、2018 年。)として、まとめました。なぜ夢について調査することになったかというと自分たちが調査をする 1 年前に“亡き人へ送る手紙プロジェクト”で書かれた、遺族の方の手紙の中に、夢についての記載が多くあったからです。～夢でもいいから会いたい。今日あなたを夢で見て楽しい一日を過ごせました～遺族の方と夢は繋がってくるのではないかと思ったのがきっかけでした。

普段私たちは夢を見たとしても大抵は忘れてしまいます。ところが突然の喪失を経験した遺族の方にとって、夢はとても鮮明で、感性や音を伴っていたりして具体的なのです。“夢日記”を忘れないように記している方もおられました。当たり前ですが夢を見たいと思って夢を見る人はいません。感覚としては受け身なので、ある遺族の方は「夢を見させられている」という感覚を持っておられました。

お話を聞いた中でとても印象的に残っている言葉は「夢の話は家族以外にはしないはずだし、取材だと言ってもよほど仲のよい記者じゃないと話さないはずだから、夢というものは表には出てこない」というものです。しかし「夢の話は絶対に誰かのためにもなる。被災地で声を出せない人に届いたら、心の復興を助ける一つにもなる」という言葉もいただきました。私自身この言葉にとても救われました。

私は震災を経験しているわけでもなく、新潟で東日本大震災を経験しました。当時中学 2 年生で、揺れがある時に（今でこそとても後悔していますが）「遊園地のアトラクションみたいで楽しい」と言ってしまった自分がいました。そんな自分が被災地に行き、なおかつ大切な方を亡くされている方にお話を聞くということは心もどかしく、ハードルの高いものでした。だから、このように遺族の方からお話を聞いて、「夢を聞くことが、その人の助けになることもある」という言葉をいただいた時に、とても救われた気がしたのです。

夢は死者と新しい交信をする時間であり、夢というものを使って亡き人との思い出に邂逅し、生きる糧にもなっているのかなと思いました。遺族の方にとって夢は現実では会うことの出来ない人と会話をし、触れ合い、時にその人の変化を見ることが出来る場所です。実際に話を聞いた

人の中には奥さんを亡くされた方で「夢の中でキスをしたその感触・暖かみは今でも鮮明に覚えている。」と言われていました。これは夢が遺族の方にとって未来を生きる希望を与えているということなのかなと思いました。

これは死者を存在しないものとして扱っている社会や、死者を喪失・忘却しようとしている社会とは逆の方向で働く力なのかなと思います。震災で大きな被害を受けなかった側からすれば、夢を大切だと思うこと＝異質なことと感じられるかもしれません。実際に自分の中でも夢というものをそこまで大切なものだと思ってもいませんでした。夢の話に限らずそうですが、世間の価値観に当てはめて捉える視点は一方的で冷たいものなのかなと思います。それを悪いとは言いません…潜在的にそのように考えてしまうこともありますし、状況を知らないこともあるので半分は本当に仕方ないことだと思います。ただしかしそのもう半分は自分の感覚と向き合いながら、あの時・あの場所にいた人側から事柄を考えることは絶対に必要なのだろうと思います。過去は過去で終わるのではなく、過去と交信することこそが未来であると言えるのかなと思います。夢を見た遺族の方の話を聞いて、遺族の方にとって夢というのは宝物なのかなと思いました。「夢をなかなか家族以外の人に話さない」というのも、プライベートで大切にしていることを、赤の他人に話すというのはなかなかないのかなと思いました。

一方、夢の話を聞く中で「自分はなぜ生かされているのか」と考える遺族の方もとても多くおられました。生き残ったことを責めてしまい、過去を苦悩し未来に生きる力がなくなっている方もおられました。そのような人たちにとって、夢というものは亡き人との思い出であると同時に、現在に起きていることなのかなと思います。私が聞いた方には「夢を見たくない」という方もおられました。その方は親友を亡くされました。地震が起き、避難先の体育館に行き、親友の方は「財布を取りに一回戻る」と言われました。その時に「“津波が来るから行くな”と言えれば、その子は財布を取りに行くこともなく、津波にさらわれることもなく、命を落とすということもなかった」という風に彼は言っていて、「自分があの時言っていれば彼は助かっただろうし、絶対に助かっていた」と言っていました。「現実で起こったそのシーンを夢の中で 100 回以上見ている」と言っていました。彼自身、夢を見たくないし、なぜ夢を見るのか分からないが、絶対にそのシーンが出てきて「“行くな”と言いたいけれど、“わかった、ここで待ってる”」と言ってしまうのでとても後悔をしていると。夢が生きる希望ではなく後悔や当時の辛い思いを思い出す一つの手段になっているという子もいます。そのような子ももちろんいますし、逆に夢が希望になっている方もおられます。

約一年間この調査をして 100 人の方に話を聞いて夢を聞けたのが 27 人でした。一番最初に調査をした人に怒られ「あなたはなぜこんなことをしているのか、夢を聞くことで話した側の気持ちを考えられるのか？分かっているのか」と言われ、挙げ句「先生のマリオネットじゃない」と言われたこともありました。ただ自分の中で先ほども申し上げた通り、印象的に残った言葉、「夢というものが、これからなかなか話せない人に大切なものとなる」というところを自分の中に落とし込んで調査を続けて行きました。この先、更に震災等起きるかもしれません。違う場所でもこの夢というものが、遺族の方や周りの方を救う手段となって欲しいなと思って私の調査は終わりました。

このような経験をさせていただいたことが自分の財産であり、今こうして皆さんの前で話す機会を与えていただいたことに感謝します。

“痛みを想像し、祈り、記憶に留める”

Ｎさん／茨城地区

３回目の参加だった。昨年 10 月に十日町教会の皆さんが、銚子への旅行の途中で鹿島教会を訪問してくださったこともあり、ワーク＆学習キャンプでありながら、親戚の家へ行くような楽しさも感じつつ参加させていただいた。

今年は、例年に比べると雪が少なめだったが、それでも 2m 以上積もった雪は、掘っても掘ってもなかなか減らず、「残して帰ったら、高齢の樋口さんが作業することになる」と思うと、つい「スローワーク」を忘れてガツガツ掘ってしまい、案の定、筋肉痛が数日続いた。当の樋口さんは、「まあ、そのうち溶けるから・・・」と、至って自然体だったのだが・・・

上島先生の講演では、「日常で構築したネットワークこそが、非常時に力を発揮する」ということを再認識した。一方で、講演の中で出てきた災害でも、自分が積極的に関わったり情報収集しなかった災害は、正直あまり記憶に残っておらず、「その災害を他人事として見ていた自分」に向き合わされた。翌日の柴田さんの講演では、「被災地の方々が抱く悲しみや不安を想像することの大切さ」を改めて教えられた。この１年も、様々な災害が国内外で発生した。もちろん、全ての被災地に足を運ぶことはできないのだが、災害が起きた時、被災地の方々の痛みを想像し、真剣に祈り、記憶に留めることは、少なくとも続けていきたいと思う。そして、この雪掘りキャンプで聞いた話や、ワーク後の筋肉痛を思い出すことが、「被災地の痛みを想像する」大きな助けになると思う。

今年も、多くの高校生・大学生が参加していた。「幼い頃、地震の揺れを遊びのように楽しんではしゃいでしまったことを後悔している」と話してくれた大学生がいた。その話を聞いて「自分も子どもの頃、地震の揺れに合わせて遊んだ経験があり、ずっとそのことが心に引っかかっていたけど、同じような人もいたんだと少し救われた」と話してくれた高校生がいた。自分の弱さと誠実に向き合うその姿に、とても共感した。人が生きていく中で、時に自分が意図せずに、他人を傷つけてしまうことがある。そのことに気付いて、逆に自分自身が深く落ち込んで傷つくこともある。それは、被災支援活動の中でもしばしば起きる。でもそこで手を引っ込めるのではなく、祈りつつひたすら関わり続ける時、神様はきっと、その傷を癒す方法や仲間を与えてくださるのだと思う。

他にも多くの方々と、いろいろな話をさせていただいた。あまりに時間が惜しくて、最終日はうっかり午前４時前まで話をしていた。多くの素敵な出会いに、ただただ感謝である。あくまでも青年向けキャンプであることは承知しているが、許されるのであれば来年もぜひ参加させていただきたい。

“再確認～寄り添うこと～”

三浦啓／桐生東部教会牧師・キャンプスタッフ

今回、私の保育園の研修があったため２日目午後からの参加となりました。十日町に到着し「今年は雪が少ない」と感じました。それでも十日町教会の教会員さんの家や十日町教会の周りで皆が雪掘りを経験しました。教会員さんの家では雪掘り以外に、家の中でお茶を飲んだり、お菓子を食べる時間がたくさんあります。「これでいいの？」とびっくりする参加者も多くいますが、一緒にお話をすること、雪がたくさん積もる十日町の生活（日常）を垣間見ることも大切な経験です。あらためて私たち参加者を毎年歓迎してくださる方々、この雪掘りキャンプを支えてくださる方々に感謝したいと思います。毎晩行われた先生方からの被災支援のお話を通して、いろいろな被災のこと、またその時にたくさんの人たちが自分にできることを一生懸命に考えながら動いたこと、また動いたからこそのたくさんの出会いと経験があったことをあらためて知ることが出来ました。柴田さんがお話の中で“寄り添う”とは、“半歩後ろから相手の２歩先を見ること”と言っていたことにとても共感しました。長く「十日町雪掘りキャンプ」をリードしてきてくださった新井純先生、柴田信也さんがまさにそのような寄り添いを大切にし、雪掘りに毎年参加するメンバーがその大切さを学び、各地へ戻っていきます。きっと今年の参加者も今回聞いた話、雪掘りで感じたことなどを、時間をかけて心の中で消化し、自分なりの寄り添いについて、被災支援について形にしていくことと思います。また来年もここ十日町で皆さんと再会し、一緒に雪掘りができればと思います!!